造形における図法幾何学，そして図学

神山 明 Akira KAMIYAMA

本稿に書くべきことは、今後の図法幾何学についてであろうが、「図学は必要なのか」という問題にやはり触れざるを得ない。また筆者はこれら問題についてまだ明確な考えを持てずにいるので、日頃感じている雑感を含めて記するがご許しいただきたい。

1. 「図学は必要か」―「美術教育」シンポジウムで考えたこと

先般「美術教育」に関するシンポジウムに出席したが、そこでは小中高等学校の教科としての「美術」時間の削減問題が議論された。行政側からは、美術の時間の削減あるいは廃止の意見が教育審議会等の公的な場でも強いという危機的状況が語られ、現場の美術教師からは経験を背景とした美術教育の重要性和意義が語られ、その議論は平行線をたどる結果となった。それは、まるで現在の図学を取り巻く状況と全く同じではないかと感じた。「美術」と「図学」を入れ替えれば、同じ構造が成り立つと思われたのである。行政側からは、「美術」が「情操教育」に必須であるという従来からの論点では、「美術」という教科の生き残りははかれないという指摘がなされた。「情操教育」という視点だけでは、「芸術」という科目でもいいし「音楽」があればよいという結論も導かれる可能性もある。「美術」はなぜ必要かという間には答えていないからである。筆者は、図学の重要性和必要性をもちろん感じ、現在の図学不要の風潮に反対するものであるが、その反対の立脚点の弱さを指摘されているようにその議論を聞いたのである。現場の教員は、体験を踏まえての実感を込めて「美術」の素晴らしさを熱っぽく語るが、ある地点を通り過ぎた体験談には「信仰」という言葉がおもわず浮かんでしまった。

2. 「学問」と「教育」をすること、あるいは「研究者」と「教員」であることの難しさ

「図法幾何学」の新たな確立は、学問としての現代性を問うものであろうが、同時に図学という授業科目を削

減消滅させないためという、極めて現実的な問題を問うものである。その二つの論点は、かたやその純粋性において、かたや現実性において両極の性質のものである。研究者であるが教員でもあるという、あまりに自明でいままさら論じることの恥ずかしいような本質的問題が、やはり問題なのである（筆者が実際に悩んでいることは、有り体に言えばそこである。望めば死ぬまで研究者あるいは作家でいられるが、科目が無くなればその時点で教育者ではいられない）。

そこで図法幾何学について考えると、今後も「図学」という科目があるとしたら（名称は変化するかもしれないが）、第三者にも答えられるその有効性は何か、という点がもっとも重要であろう。有効性を語らなければ、なぜ図学が必要かという間には答えられない。そしてその有効性の中で「図法幾何学」が何をなし得るかという事が重要である。「図法幾何学」の有効性を先に考えていくと、無理な自己正当化に陥る危険性を感じざるを得ない。完成された「図法幾何学」の体系の美しさに筆者は感動を覚えるものであるが、それを語る場を間違えると、聞かされる側は「信仰」としか思えないかもしれない。

3. 工学系と造形系との「図学」の違い

筆者が自分のための資料や授業のテキストとして使うものは、工学系の方々の書かれたものが多い、そこで常に感じることは、造形の分野の学生にその内容のどこまでを教えるかという事である。作図や形態の基本的理解と各種投影法等を基本とし、造形系としての授業で不足すると思われる内容を追加し、課題を設けている。

そこでより造形に関わる内容を扱おうとすると、投影を中心とする図法幾何学の時間は不足することになる。また投影を中心とした内容を確実に行おうとすれば、授業は「図法幾何学」そのものに近づいてしまう。「図学」の有効性を考える以前に「図法幾何学」だけの授業になりかねない。授業では工学系の教科書を「利用させても

らっている」というのが実感である。その中で造形系の各教員は、個々に造形に必要と思われる内容を工夫しながら授業を行っていると思われる。その際、造形系の図学を担当する教員同士の、授業内容の連携がさらに必要であろう。造形系は図学に関わる方々全体の中では少数かもしれないが、それならなおさら授業内容の工夫も共有できるであろう。造形における「図法幾何学」の位置づけは其中で明確になるかもしれない。

しかし、各自が工夫している造形を背景とした授業内容は、基本的に「個人の出題する造形的側面を持つ課題」になりがちであることが、本質的な問題でもある。

「図学」あるいは「図法幾何学」は学問としての大系を持つものに対して、「造形的課題」は極めて個人的側面を持つものである。その部分が多くなればなるほど、授業は「図学」という一般性のある学問から離れてしまう。筆者の場合授業の中で行っているのは「神山の課題」になるのだろうが、「神山の課題」に他者を納得させるだけの普遍性を持たせるのは、至難のわざであろう。

また「造形系」といっても、現実には「造形」専攻の学生はおらず、「絵画」「彫刻」「工芸」「デザイン」「芸術学」その他、様々な学生が「造形系」として存在している。その各分野において、「図学」に求める内容は自ずから異なるであろう。「造形」なのであるから、それらの差異は小さいと見ることもできようが、実際にはその造形の解釈はとりわけ近年は異なっているであろう。

「絵画の何に」あるいは「デザインの何に」有効かということ、共通のものとして提示することは、極めて困難である。基本的な造形力を背景とした思考や表現という素朴な観点からは、今日の造形他分野をくくる事はできない。そこで「造形一般」に有効性のある「図学」を考えると、より本質的な図と形の普遍的内容に向かわざるを得ない。そうすると即効性のある内容とは遠くなり、有効性のある図学とは遠ざかってしまうのである。

4. 普遍性のある「造形の図学」のありかた

このように今日の図学は、有効性を持たせようと思えば、専門分野別あるいは個人的なものになり、授業科目として求められる一般的な有効性とは相反する問題がある。しかし、筆者は解答を得ていないのであるが、また「信仰」であってはならないのだが、なお、「造形のた

めの図学」の一般的な形があり、なお有効性のあるものはあるはずだ、というのが筆者の考えである。

問題は緊急のことであり、悠長な事を言っている場合では無いのかもしれないが、それは「より本質的なものに戻る」というのが、ひとつの考えなのではないだろうか。

モンジュの「図法幾何学」から始まったのが現在の「図学」の基本なのだろう。では何をモンジュは「図法幾何学」として体系化したのだろうか。「石切術の図法」「画家の透視図」など、それまでにあった形や図に関わる諸分野の技法や思想を体系化したのではなかったろうか。その後、「図法幾何学」は発展し、日本においては工学系の大学や師範学校で基礎科目となり、美術系の学校では透視図の基礎として教育されていく。その工学のための基礎あるいは絵画のための基礎という立場は、現在もある「製図のための基礎」あるいは「造形のための基礎」という、専門に対しての弱い立場に続くものではないだろうか。本来図法幾何学は何を解決したのかを考えてみると、とりわけ造形の分野の場合、絵画や図一般における空間の表現や、立体の理論的な理解など、普遍的な造形の基本に関わるものであることはあきらかである。その基本的な問題を、どのように提示するかが重要であろう。そこでは図法幾何学の基本を踏まえることが必要であろう。しかし、「図法幾何学」を前面に出す必要はないかもしれない。現在「図法幾何学」それ自体は「有効性」を訴え得るものではないだろう。また、コンピュータやCAD,CGの登場への対応に重点を置いては、「有効性」の確立が難しいと思われる。まず造形の立場での普遍的な形体や表示の問題を提示し、それを「図法幾何学」を中心として考えることが重要であろう。そしてさらに、前述した「個々の教員の工夫による課題」を、個人的な一回性のものでない広く図学に関わる人に共有しうる普遍的なものに高められれば、より望ましいのではないだろうか。

かみやま あきら

彫刻家、東海大学教養学部芸術学科教授
1953年生まれ、1977年東京芸術大学大学院修了
個展、グループ展等で作品を発表
図学、造形理論、造形演習等の授業を担当